||||紹　介||||

スティーブン・W・モッシャー著／松本道弘監訳『中国はこれほど戦争を好む』

澤　　喜司郎

（Ⅰ）

著者は人口問題の世界的な権威で，1979年から1980年にかけて中国の農村部に米国人研究者として初の現地調査を敢行し，中国政府による人口抑圧の悪夢を目の当たりにして，これを全世界に告発するために帰米を決意した直後に中国官憲に逮捕・監禁され，不本意な供述書を書かされた上で国外退去処分を受けた。スタンフォード大学に戻った著者は，徹底した中国史の精査をもとに現地で目撃した人口管理のおぞましいさ，その歴史的背景についての論文を執筆していたが，中国政府の要求に屈した大学当局によって博士号を授与されることなく大学から追放，退学処分にされた。

著者は「中国の暗黒の核心に遭遇し，私の心は驚くほど硬化していた。自由主義者でも後ろから首を絞められたりすれば保守主義者に変わるのと同様，『中国の友』だって中国当局から逮捕されれば中国批判者ともなるだろう」「『非友好的な行為』を行ったとして，私の名前は『中国の敵』という名の外国人ブラックリストの上位に載せられている。だが言うまでもなく，私は中国の敵ではない。むしろ，中国人民の友人であり，彼らの幸運を心から願っている。また，中国人のために，中国により良い政府が生まれることを祈っている。だが現在の中国政府は，『覇権国』となることにしか精力を傾けていない。だから私は祈ってやまない。本書の主題はそこにある」と記している。

本書の章構成は，

序　章　中国の「危険な賭け」

第１章　中華帝国復権の野望

第２章　血で書き継がれた中国戦争史

第３章　覇権遺伝子と共産独裁の出会い

第４章　大中華主義が鼓舞するナショナリズム

第５章　アジア支配を目指しての軍事大国化

第６章　迷信に翻弄されるアメリカの対中政策

第７章　米中対決の現実的可能性

おわりに　中国研究者に求められる「勇気」

であり，本稿では本書の内容を簡単に紹介したい。

（Ⅱ）

序章「中国の危険な賭け」では，著者は天安門事件によって「中国は，強大になる前に生まれ変わるだろう，中華人民共和国は，アメリカが立ち上がってその野望を阻止する前に民主化を始めるだろう」「その後に続いた流血の惨事でさえ，時代遅れの体制の最後のあがきと受けとめることもできた。反体制派に対して，より寛容で，しかも本気で政治改革に着手する意欲のある《新しい政府》がまもなく生まれ，現体制に取って代わるだろう」と考え，「天安門事件の殉教者たちは，中国建国の父となるのだ」「中国共産党が崩壊寸前で，民主革命が起こるのは時間の問題だと思い込んでいた」が，それは「単なる個人的妄想にすぎないとわかった」し，「中国の過去の全体主義が，現在の中国にもいまだに影を落とし，その将来までも限定しているのだと思いしらされた」という。そして，天安門世代の次の世代，つまり現在の学生たちは「中国を本来あるべき地位から締め出しているのはアメリカだと教えられ」，「中国が世界随一の超大国になるように望んでいる」ばかりか「世界に覇権国は二つもいらない，と信じている」と指摘している。

第1章「中華帝国復権の野望」では，「全体主義は，現代世界ではすでによく知られた概念だが，覇権主義は，それとはいくぶん趣が異なる考え方だ。その対外政策の最大の目標は，まず周辺地域を完全に支配におさめ，その支配を徐々に広げて最終的に世界全体を支配するというもので，これは西欧にはない考え方だ」「覇権主義では，全体主義が前面に押し出されるのが当然であり，領土問題などは，武力で解決されるのがあたりまえ」で，「中国の指導者たちは…明らかに《覇権国》の称号を切望し」，「覇権国となるべき国は，その歴史と文化の両面から見て，中国をおいてほかにはない。《覇権国》に固執する中国人は，中国に課せられた明白な運命説を懐いている」という。また「中国人はみな，いまだに中国の権威の失墜を無意識のうちに恥ととらえている。《失われた面目》は，国際社会の中に居場所を確保しただけでは取り戻せない。…完全に恥辱を晴らす方法はたった一つしかない。中華帝国が，再び本来就くべき地位，すなわち，世界の中心に座ることだ」と考えているため，中国は「怨念に満ちた新興の超大国という厄介な代物だが，中国はそれだけの存在ではない。世界の中心国にふさわしい地位を当然の権利として再度，要求しようと狙う覇権国」と位置づけている。

第2章「血で書き継がれた中国戦争史」では，「自らの歴史の，ほかならぬ形成期の時代に，中国人の精神には深い傷跡が残された。まさにこのとき以来，その傷跡は《混乱》と《無秩序》を本能的に恐れる傾向となって，今日に至るまで続いている」とし，「秦王朝が確立する過程で法家流の改革によって具現化された絶対主義は，中国の政治文化に根づき，その後今日まで政治の場で実践され続けてきた」としている。そして，「秦の意図した独裁政治の仕組みは，絶対君主，中央集権型官僚制，国家による国民支配，懲罰の道具としての法律，相互監視と密告ネットワーク，反体制の動きへの弾圧，国民を抑制する恐怖政治など」で，「これらの仕組みは，中国文化の遺伝子（DNA）に刻み込まれ，何世紀にもわたり，王朝が交代しても変わることなく続いていく。中国がいまだに中央集権型の独裁官僚国家であり，次の覇権国の座を待ち望む帝国であったとしても決して驚くことではない」という。また，中華王朝は「中国周辺の劣等民族に暴力をふるうことを喜び勇んで裁可したのだ。武力の行使は，中国のお家芸だと言っても過言ではない。中国の武力行使の必然性には何の疑問もない。それは，中国の覇権思想には武力行使が組み込まれているからだ」と指摘している。

（Ⅲ）

第3章「覇権遺伝子と共産独裁の出会い」では，「毛沢東の野心は，王朝を力ずくで築き上げて現代の始皇帝となり，昔と同じ全体主義の政治体制によって昔と同じ領土を支配することだった。《秦の政治体制》を現代に確立するには，儒教に代わる思想，統治の正当性を保証する新しい思想，国民の理解できる思想が必要で」，「毛沢東ら中国の革命家は，自分たちの権威主義的な野心にぴったり合う，願ってもない思想を見出した。《マルクス主義である》」という。そして「マルクス・レーニン主義は，公民権や人間の平等をはっきり認めているものの，覇権国家中国には都合よくできている。教育されたエリートの権力独占を擁護し，国家と市民社会との関係も，中国独裁政治の伝統にとても馴染みやすく定義されている」ため，「前代未聞の非道徳的かつ世情に通じた冷酷な法家流支配者」である毛沢東は「千年の歴史を持つ全体主義の伝統を遺憾なく活用して中国国内の支配を固め」，「自らが長らく傾倒してきた法家の皇帝となり，全体主義と覇権とを振り回すことに夢中になっていった」ばかりか，「かつての中華帝国の領土まで支配することが自らに課せられた天命だと信じていた」という。

第4章「大中華主義が鼓舞するナショナリズム」では，「国家思想としての共産主義は，中国国内で急速に

衰退に向かっている。だがそれは，現在の権力者集団の根本を揺るがす脅威になることはない。現在の共産主義は中華独裁主義の《現代版》にすぎないのであって，共産主義が消滅しても独裁主義の伝統は無傷で残る」とし，「共産主義に代わって国家の正統性を保つ拠りどころとして，最近注目されているのは《大中華主義》だろう。大中華主義は，民族主義，伝統主義，自民族中心主義，文化主義を要素として取り込んではいるが，その組み合わせが中国独特で，人々の精神への訴求力が強い」という。そして「天安門事件後の中国共産党は，大中華主義者になることによって，中国を民主化から守る一党独裁体制という長城の崩壊を防ごうとしている。現代の法家は，朽ちかけた党神話に代えて，民族を基盤とした骨太の排他的愛国主義（つまりは大中華主義）を導入しようと努力し」，「愛国教育政策で取り組むべきは，過去の出来事の正確な記述ではなく，若者の血をたぎらせるために作られた精神論物語の普及」で，それは「民族としての誇りを取り戻し，民族主義に火をつけ，共産党を力強い民族主義の象徴にすることにより，その低下したイメージを向上させるのが狙いである」としている。

第5章「アジア支配を目指しての軍事大国化」では，「中国共産党は，中国の軍事国家としての伝統，共産主義理論，そしてまた党自体が軍事組織として誕生したことを根拠に，《戦争の不可避性》という概念を掲げ続けてきた」が，明確な戦争の脅威が存在していない現在において人民解放軍が核兵器も通常兵器も急速に最新鋭のものを拡充していることは注目すべきだという。そして，江沢民は1996年に「軍現代化のために経済活動全体の近代化を進めるという鄧小平の方針を再確認し，これを成文化し」，このことは「中国経済の急速な拡大によって，軍事予算も同じ速度で拡大すること」を意味している。また，中国は「世界中の最新兵器をやたら買い集め」，「兵器購入の規模でヨーロッパや中東を凌ぎ，合法的にも，非合法的にも，兵器とその関連技術の世界一の輸入国となった」ばかりか，「アメリカの科学者が50年かけて研究し，作り上げたものを，中国はたった10年で盗み出し，コピーしてしまった」が，このような中国の軍事大国化は「アメリカの支配を終わらせ」，「パックス・アメリカーナに代わるパックス・シニカ（中国による世界平和）の確立」，つまり全世界の覇権を確立するためであるとしている。

(Ⅳ)

第6章「迷信に翻弄されるアメリカの対中政策」では，「これまでアメリカ人にとって，中国は国家というよりは一つの《姿》だった。アメリカ人は，いつも自分たちの願望や想像で中国をイメージしてきたのだ。こうした幻想の虜になるにつれ，より厳しい現実に抵抗してきたといえる。あげくの果てに，今ではアメリカの干渉があろうとなかろうと，『中国国内で平和的革命を引き起こす力が解き放たれ，市場主義・民主主義が生まれるだろう』という幻想に浸っている」ばかりか，「『アメリカが中国を変えようとさえしなければ中国は変わる』などと力説する」者もあり，「かくして，アメリカの対中政策を左右する多くの《迷信》ができあがった」という。そして「共産主義はもはや死に体で，中国にも民主主義の波が押し寄せてきている」「市場の影響力の増大と国際取引が，中国を市場主義・民主主義の国に生まれ変わらせるだろう」「アメリカ文化への傾倒が，中国をアメリカのコピー国家に変える」「通信革命とインターネットが中国を変える」「中国がすでに変わっているという事実は，我々自身が中国を恐れているからだ」という迷信について検証し，それはいずれも間違いであることを指摘している。

第7章「米中対決の現実的可能性」では，「今でも，歴史上の経緯と文化的な優越感とからアメリカを敵視している」中国の野望は「《パックス・シニカ》の完成である」ため，「中国に対する《関与》政策（クリントン政権が採った中国との《戦略的な協力関係》追求政

策‥筆者加筆）に自らの安全保障を委ねるわけにはいかない。中国の力が増すにつれ，日本や韓国，台湾，フィリピンとの同盟関係の継続または再構築が不可欠になる」と指摘している。そして「アメリカの外交政策が目指すべき最終目標は，中国の，無法な抑圧を行なう一党独裁体制から，法の支配する民主国家への平和的な変革実現である」ため，「アジアで安全保障条約を結んでいる国のなかでも，日本との関係は特に重要」で，「アジアにおける強力な米軍のプレゼンスがなければ，日本は再軍備をするか，否応なく中国の勢力圏に繰り入れられるかの，二者択一を迫られ」，「もしアメリカが日本とのつながりと日本国内の米軍基地とを放棄すれば，中国に対抗できない」ばかりか，日本は「アメリカとの協調と保護を望んでいる」ため「アメリカは，この日本との関係を大切に育てなければならない」という。

おわりに「中国研究者に求められる《勇気》」では，中国は「人間の欲望を利用して（政府高官や中国研究者を‥筆者加筆）虜にしておき，米中間に何か問題が生じれば，それとなく誘導して中国に都合の良い行動を取らせるのだ。中国が何か非道な行ないをした場合には，鼻薬をきかされた連中が，間髪入れずに中国を擁護する発言をする」とし，天安門事件後のキッシンジャーの「首都の中心にある広場を，8週間にわたって1万人ものデモ隊が占拠し，主要な政府機関の建物の前を塞げば，世界中のどんな政府でも我慢できないだろう」という発言を紹介している。そして「中国政府のビザ発給停止や，研究の非承認を懸念して妥協的な態度をとる中国研究者は，これからも絶えることがないだろう」が，「中国政府に対するこうした迎合姿勢は，やはり次第に見られなくなっていくだろう」とした上で，「覇権国が自らの周囲に築いた威嚇の長城を崩壊させる時期が到来したのだ。アメリカ，そして全世界の中国研究者が臆することなく，おもねらずに自説を主張する意欲を持てば，中国の挑発に対する各国の対応も変わる可能性が非常に高い。中国研究者が真摯な態度で仕事をすれば，一般の人々や政策決定者も同じような反応を返してくれるだろう」と結んでいる。

（V）

最近の中国の横暴さは目に余るものがあるが，そのような中国の本質を本書は明解に解説している。本書の日本での宣伝文句は「問題は《靖国》でも，《尖閣諸島》でもない。真に憂慮すべきは，あの国の《好戦体質》だ」とし，少し違う気もするが，一読に値する書物であることは間違いない。

著者のアジアにおける安全保障観や，「おわりに」で述べている「中国研究者に求められる《勇気》」には共感を覚えた。また，訳者の松本道弘氏が監訳者解説の中で「日本がいずれ覇権を争う米中…のいずれの覇権国家にも隷属しない自尊心と独立心を取り戻すには，戦前の誇り高き蟻（サムライ）に戻ることだろう」としているのも興味深い。

最後に，浅学非才な筆者には的確な紹介ができず，また筆者の不勉強による誤読の可能性もあり，この点については著者及び訳者のご海容をお願いする次第である。

（成甲書房，2004年3月，284頁，定価1,800円+税）